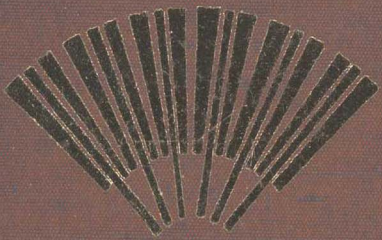

十六夜橋

いざよいばし

石牟礼道子

径書房

十六夜橋　いざよいばし

一九九二年五月三十日発行

著　者© 石牟礼道子

装　幀　加藤光太郎

発行者　原田奈翁雄

発行所　株式会社 径(こみち)書房

東京都千代田区三崎町二-一三-五影山ビル

電話　〇三-三二二三-四六〇八

FAX　〇三-三二六三-七〇一九

振替口座　東京一-三二七二六

印刷　明和印刷株式会社

製本　京美印刷株式会社　積信堂株式会社

PRINTED IN JAPAN　0093—0105—2507

十六夜橋　目次

第一章　梨の墓　七
第二章　ほおずき灯籠　九四
第三章　十六夜橋　一四六

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongbo

第四章　みずな　二二三
第五章　櫛人形　二九七
第六章　雪笛　三三六

十六夜橋

いざよいばし

第一章　梨の墓

三味線が早弾きの乱調になった。皿小鉢が鳴り出した。ほいっ、ほいっと掛け声が湧く。おんじょう殿が唄うなと一同が思っていると、掛け声を割ってさびの利いた高い声が唄い出した。

はいやぁーえ
はいや！

ひと声出たら座はもう全部囃子方になって、あっち揺れこっち揺れしながら、皿やら徳利を叩いている。

はいやぁーえ　はいや
かわいや
今朝出した舟はえ
どこの港に
さま　入れたやら
えーさ
牛深三度ゆきゃ
三度はだか
鍋釜売っても
酒盛りゃ　して来い

「おっ、出た出た。はいや節が出たからにゃ、銭じゃこも出ろ」
「おう銭じゃこ、出ろ出ろ」
「三やん出ろ、三やん」
三之助は四つん這いにつんのめるように、一座が総囃子方になった真ん中に押し出され、とろんとした顔をしている。向う鉢巻をしたまんまの、稚な顔だった。いま十六になる。

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongbo

「ほれ鉢巻、三やん踊れ、銭じゃこ踊れ」

三やんこと、三浦三之助の銭じゃこ踊りというのを、先頃みんな見ているのだった。人が集まれば酒になる土木請負業の家だが、この家の初孫の紐解き祝いに、一人一芸出さねば寿司もおはぎも食わさぬと言われて、盃半分ほどの焼酎をひっかけ、用意の竹筒を持ち出して踊ったのが人気の的となった。十里ばかり離れた薩摩の島から、石工の修業に来た少年だった。小学校を出て、父の漁を手伝って漁師になるつもりだったらしいが、湾口からほんのちょっと外海に烏賊釣りに出て突風に遭い、父親だけが死んでこの子は助かったのだと、連れて来た人が話したという。

紐解きをすまして数えの四つになった綾が、顔を見てすぐから、三やん三やんとよくなつき、ぐり石を入れ替えたりする河川工事の現場が近いと、後ろから見え隠れについて行ってしまったりした。

じゃらんと音がして、紅白の切り花紙を両端にくっつけた銭じゃこの竹筒が、畳の上をくるくる舞いながら、寝ぼけたような目をしばたたいている三之助の前に転がり出た。白三毛の小猫が切り花の舞うのを追っかけて抱きつき、筒の中にどんな銭がはいっているのやら、猫の躰ながらちゃらちゃらと鳴った。それがどんちゃん騒ぎの中でのどかに聞える。

「こらっ、タマっ、かじるなえっ」

三之助が自分で作った花筒を、羞ずかしがりながら大切にして、着物棚の下に隠し込んでいるのを、みんな知っていた。三味線が賑わい節のはいやえになったので、誰かが取り出して転がし

やったものと見える。

はいやぁーえ
来たかと思えば
また南風(はえ)の風ぇ
えーさ
黒島沖からやって来た
新造か　白帆か
白鷺か
よくよく見たれば
わが夫(つま)さまだよ

三味線の調子が一段と高くなって、酔っぱらいたちが、あぐらに組んだ膝の調子で叩く皿小鉢の音で、家鳴(やな)り震動するのだが、珍しいことではない。開け放された表縁から、港通いの戻り馬車が止まって、のぞき込んでいる。その表から張りのある女の声で、歌の続きが飛び込んで来た。

五島へゆくなら

わたしにゃおひま　ハッ、
買いなされ　買いなされ
五島女郎を

先隣りの花月楼で店を張っている吉弥姐さんの声だ。こんな風に賑わってくると、先隣りの縁台からときどき出張ってくる。躰はもう踊りになって、こちらの客人をひやかすのである。
「よおっ」
振り返っていっぺんに座が沸いた。
「ひゃあ、姐さん上んなっせ、上んなっせ」
真っ白けに塗って、背中を抜いた衿足を姐さんはくねらせた。結いたての銀杏返しだ。
「上ろかな」
そう言ってみせたが、たちまち片袖を振った。
「おほほ、わたしが上っちゃ商売にならん。店い来て、一艘づれ賑わいなっせ」
どっとまた声があがる。
「ゆくぞ、ゆくぞ、賑わいにゆくぞ」
「こらあ吉、どこで商売する気か、お前や」
若あるじの国太郎が大声をあげたが、叱っているわけではない。

「まあまあ国太殿、たったの一度も来てくれ申されんで、誘いぎゃ来申したがな」
天草ことば丸出しで、姐さんも負けてはいない。
「ばか、先隣りの女郎屋に、どの顔下げてゆかるるか」
「そのまんまの顔でよかたぁ」
若い衆たちが肩をゆすりあってひっくり返ってみせる。その拍子にお膳の上のものがはね飛んだ。
「よーいっ、お前どもは、よその家じゃけんと思うて、踏みほがすなや」
家鴨が中腰になったような恰好で、燗瓶をつまみ上げたまんま、飛松小父が爪先から踊り出した。はいや節が出るとかならずまっ先に、山太郎蟹のような顔をしたこの船長が踊り出すのだ。
「そうじゃ、そうじゃ、この家もだいぶ、根太が傾いとるけんのう」
帳付けを手伝っている巳之喜兄やんが、さし出された燗瓶を受けとって隣りへつぐ。
「ほんに、ほれ、飛松小父がゆらゆらされるばっかりで、家鳴りしよるぞ」
「十一文半じゃけんなあ、船長の足は」
開けたばかりの港から、船長は牛深通いの定期船を出しはじめていた。根太のゆらぎ出したこの本家にくらべて、飛松小父だけは無傷で、先の見える商売になったといわれている。
「どうした、どうした。三やん、そうれ、ほれ」
タマがまだしがみついている花筒を取りあげて、誰かが三之助に押しつけた。朝晩の挨拶をす

るのさえもまだぎこちなくて、伏し目がなかなか上らない。それがこの前、銭じゃこを踊ったときの、飄々とした愛敬で、並みいるものをひきつけてしまったのを、またやらせたいとみんな思っている。

「そーれ、そーれ」

「そーれ、そーれ」

三之助にさっきまでくっついていた綾が、壁ぎわに後すざっている。そーれ、そーれと声がかかるたびに、まるで自分が押し出されたように羞かんで息をつめているのがおかしかった。座敷と居間の襖がとりはらわれ、上り框に近い納戸に囲炉裏が切ってある。そのぐるりに、ずらりとならべた徳利に囲まれて、大きな鉄瓶がしゅんしゅん鳴っていた。

「ほら、綾しゃまが、踊ってみせろちゅうとる。はようせんかい」

半分あぐらの中に、小猫と花筒を遊ばせていた三之助がちらと綾を見て、白い小猫をそっちへ拋ると、鉢巻を締め直した。頬を赤くして伏し目のまんま、大根鱠の入っていた皿を二つ取りあげて左手の指にたばさみ、右手で銭じゃこ筒を拾いあげると中腰になった。三味が止んで戸惑ったような爪弾きになった。おんじょう殿は、銭じゃこ踊りにつける調子を、とっさには思い出さぬらしい。

三之助は照れた顔のまんま、紅白の切花が両端についている竹筒をくるくるまわし、肩で拍子をとっていたが、腰をかがめて身軽に舞いはじめた。片手の指で二枚の皿をカチカチ合わせ、片

手で大きく花筒を振ると、じゃらっ、じゃらっと筒が鳴った。うろうろしていた三味線がついて来て、おんじょう殿が、つややかに唄い出した。

国はどこかと問わるれば
花の長崎よりゃ　まだ遠い
　えいさ　えいさ

親は誰かと問わるれば
唐は天竺　岩山育ち
　えいさ　えいさ

唐は牡丹の花どころ
獅子の珠舞い　花の夢
　えいさ　えいさ

渦のように舞い出した花筒が、軽々と三之助の膝の下をくぐり抜ける。賄方の小母さんたちが、燗つけの手をやすめてふうと溜息をついた。あらためてその舞姿を見れば、だぶだぶの土方ズボ

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongbo